

芽は伸びる

小川未明

青空文庫

泉は、自分のかいこが、ぐんぐん大きくなるのを自慢していました。にやりにやり、と笑いながら、話を聞いていた戸田は、自分のもそれくらいになったと思っ
 ているので、おどろきはしなかったが、誠一は、ひとり感心していました。お母さんが、きらいでなければ、自分もかいこを飼いたいのです。なんでお母さんは、あんな虫が怖いのだろう。お母さんや、妹が、かわいい顔をしているかいこを、気味わるがっているのが、不思議でたまらなかつたのであります。そこへ、ちようど理科の長田先生が通りかかられました。

「君たち、なにをしているね。」と、みんなの顔を見て笑っていられたのです。

「おかいこの話をしていたのです。先生、僕のおかいは大きくなりました。」と、泉が、いいました。

「そうか、学校のと、どっちがいい繭を造るかな。」

「競争するといいや。」と、戸田がいました。

「君も、飼っているのかね。」

「飼かっています。」

ひとり誠せい一いちがだまつているので、先生せんせいは誠せい一いちの顔かおをごらんになつて、

「南みなみ、おまえは。」と、お聞ききになりました。

誠せい一いちは、こないだ先生せんせいがみんなにかいこを飼かつてみるようにおすすめなさつたのを覚おぼえています。自分じぶんだけ飼かわぬと答こたえるのは、なんだか理科りかに対たいして、不熱心ふねっしんに思おもわれはせぬかと考かんがえたので、

「僕ぼく、かいこを飼かいたいのですけれど、かいこがないのです。」といいました。

「ほんとうに飼かうなら、学校がっこうのを四よ、五匹ひきあげよう。あとからきたまえ。」と行って、先生せんせいは、誠せい一いちの頭あたまをぐりぐりとなでて、彼方あつちへいつてしまわれました。三人にんは先生せんせいの後あとを見送みおくつていましたが、たがいに心こころの中なかでやさしい先生せんせいだと思おもつたに、ちがいはありません。

「じゃ、みんなで、競きょうそう争そうしようか。」と、泉いずみが、いいました。

「いいとも。」と、戸田とだが、答こたえました。

まったく経けい験けんのない、そして、どうするかも知しらない誠せい一いちは、すぐすぐに返事へんじができなかつたのです。

誠一は、

「むずかしいだろうね。」と、心もとなさそうに、いいました。

「僕、よく教えてあげるよ。お菓子かしの空あき箱ばこと、あとでわらがあればいいんだよ。」と、戸田とだが、勇気ゆうきつけてくれました。

「それに、桑くわの葉はがないのだが。」

「桑くわの葉はなら、僕ぼく、明日あした学がっこう校もへ持もつてきてあげる。びんの中なかへ水みずを入れていておきたまえ。」と、泉いずみが、教おしえました。

二

誠一は、先生せんせいが、大きな桑くわの葉はの上うえへ、かいこを七ひき匹ばかり、のせて渡わたしてください。たのをありがたくいただきました。さあこれをどうして持もつて帰かえつたらいいだろう。紙かみもなかつたので、葉はの上うえにのせたまま、それを手てのひらで支ささえて、そろそろ歩あるいて、学がっこう校もの門もんから一人出ひとりたのであります。

うすい、白雲しらくもを破やぶつて、日光にっこうはかつと町まちの建たて物ものを照てらしていました。車くるまが通とおりま

す。自転車じてんしゃが走はしつていきます。そのあわただしい景色けしきに心こころを奪うばわれるでもなく、誠一せいは、ゆっくり、ゆっくり、おかいこを見守みまもりながら、道みちを歩あるいてきました。町まちの人々ひとびとは、なんだろうと思おもつて、誠一せいの手てをのぞくものもありました。

「やあい、おかいこをあんなこととして持もつていくやあい。」と、笑わらっている子供こどももありました。いつもなら、十五分ふんぐらいで帰かえれるのに、三十分ふんあまりもかかって、やっと我が家わがやの門もんが目めにはいったのです。

「お母さんかあが、いけないといつて、しかりはしないかなあ。」と、誠一せいは、ちよつと心しんば配いになりました。

「誠ちゃんせい、たいそうおそかつたですね。」

お母さんかあは、そうおつしやいました。

「先生せんせいから、おかいこをもらつてきたのだよ。」

誠一せいは、先生せんせいからといつたら、お母さんかあは、許ゆるしてくださいりはしないかと思おもつて、先生せんせいといふ語ごに力ちからを入いれたのです。

「お母さんかあは、はだか虫むしがきらいなのを知しっているでしょう。なんでそんなものをもらつてきたのですか。」と、お母さんかあは、おつしやいました。

「生系は、日本の大事な産業だつて、それで先生がみんなに飼つてごらんとおつしやつたのです。かいこはちつともこわくもなんともないのに、お母さんがこわがるのは、お母さんが、よわ虫だからだろう。」と、誠一が、いいました。

「ほんとうにそうですね。じゃ、私の目につかないところに置いておくれ。」

誠一は、お母さんがそうだったので、いくらか安心しましたが、おかいこをどこへ置いたらいいだろう。

「お母さんの目につかないところつて、どこかなあ。」

妹といつしよに勉強強するへやに置くことはできませんでした。妹がやはりお母さんと同じく、虫がきらいだからです。

「物置にしようか、あすこは、暗くて、風がよく通らないし。」と、考えているところへ、学校で約束した、戸田がやってきました。

「先生からいただいたおかいこをお見せよ。」

「こんなんだ。」

誠一は、もうしおれかかった桑の葉の上ののっているかいこを見せました。

「大きいんだね。もうじき上がるんじゃない。僕のは、こんなに大きくないよ。」

「先生だから、うまいんだろう。」

「早く、お菓子の空き箱を持っておいでよ。」

誠一は、お菓子の空き箱を出しました。また近所の米屋へ走って行って、わらももらつてきました。戸田は、かいこを飼う箱を一つ、まぶしを一つ造つてくれました。

「ここらに、桑の木はないのかい。」

「君のうちにあるの。」

「僕のうちの、縁日で買った苗木だよ。」

「ここらに桑畑がないんだ。」

「あとで、さがしておいでよ。こう細かくきざんでやるのだ。」

三

戸田が、帰つてしまつた後でした。

「誠ちゃん、こんなところに、おかいこを置いては、かわいそうじゃありませんか。風の通る涼しいところがいいではありませんか。」と、物置へは行って、石炭を出して

られたお母さんが、かいこの箱を見つけておつしやいました。

「お母さんの、見えないところといったんでしよう。」

「あんたのおへやに置きなさい。」

「みよ子がいやだというのだもの。」

「あの子も、私にたのですね。そんならお座敷に置きなさい。」

「え、お座敷に置いていいの。」

「ちらかさないように、下になにか敷いてね。」

お母さんが、そうおつしやると、誠一はうれしかったのです。やはりお母さんは、やさ

しいなと感じたのです。

門の外へ出ると、西の空が赤々としていました。とみ子さんや、よし子さんや、勇ち

やんたちが、遊んでいました。

「どこかに、桑の木がないか知らない。」

「おかいこにやるの。」

「うん、先生から、おかいこをもらってきたけれど、桑の葉がなくて困っているのだ。」

「僕に見せておくれよ。」と、勇ちやんが、いました。

「わたし、知^しっているわ。原^{はら}つぱにあつてよ。」と、とみ子^こさんが、いいました。

「どこの原^{はら}つぱに。」

「土^ど管^{かん}の置^おいてある、原^{はら}つぱに。」

「ほんとう。僕^{ぼく}、桑^{くわ}の木^きなんか見^みなかつたがなあ。」

「あつてよ。おしえてあげましょうか。」と、とみ子^こさんは、真^まつ先^{さき}になつて、原^{はら}つぱの方^{ほう}へ駈^かけ出^だしました。あとからみんながつづいたのです。

原^{はら}つぱの片^{かた}すみの方^{ほう}は、草^{くさ}の茂^{しげ}つたやぶになつていました。そこへは、近^{きん}所^{じよ}の人^{ひと}たちが、よく空^あき俵^{だわら}や、ごみなどを捨^すてるのです。そのやぶの中^{なか}をさして、

「ほら、あの木^きがそうよ。」と、とみ子^こさんがいいました。そこには、青^{あお}々^{あお}とした、一本^{ほん}の木^きが、夕^{ゆう}日^ひの光^{ひかり}を浴^あびていました。

「あれ、桑^{くわ}の木^きかしらん。」

「そうよ。」

誠^{せい}一^{いち}は、やぶの中^{なか}へはいつていきました。いつか、ここで、ねこが子^こを産^うんだことがあります。

「ねこが、ここで子^こを産^うんだね。」

「あのねこは、死んじやったよ。」と、勇ちやんが、いいました。誠一は、白と黒の、あわれなねこの姿が目に浮かんだのでした。彼の後について勇ちやんも、とみ子ちゃんも、よし子ちゃんもはいってきたのです。

「ほんとうに、桑の木だ。」

「赤い実がなっているわ。」

「ここにも。」

みんなが、わあわあいつていると、すぐあちらの家のおばさんが、生垣の間から、こちらをのぞいて、

「みんな葉をとらないでください。私の家にも、おかいこがありますからね。」といいました。

こんなにかくさん葉があるのにおもって、誠一は、へんな気持ちでしたが、

「すこししか、とりませんよ。」と、答えました。子供たちは、また、草を分けて、原っぱの広々としたところへもどると、

「いやなおばさんだね。」と、とみ子さんが、いいました。

「やな、ばばあだな。」と、勇ちやんが、いつて、みんなは、赤い屋根を見上げました。

四

翌日、学校へいくと、泉はしんせつにびんの中へ桑の枝をさして、持ってきてくれました。

「こんど、僕の家へ取りにおいでよ。自転車に乗ってくれば、わけがないだろう。」といいました。

その桑の葉はつやつやとして、色が黒く、厚くて、ほんとうにうまそうです。こんな葉を食べているおかいこは、きつとよくふとつているだろう。そして、いい繭を造るにちがいない。競争は、泉の勝ちかもしれないと、誠一は思いました。

学校の帰り道で、戸田といっしょになったのです。

「君のところの桑の葉も、こんなに大きくて、おいしそうかい。」と、誠一は、たずねました。

「まだ、木が小さいからね。」

「僕は、原っぱに生えている桑の木の葉を取ってきたけれど、かたくて、おいしくなさそうだ。」

「それは、こやしを、やらないからだよ。」

「これは、こやしがきいているんだね。」

「そうさ。」と、戸田は、なぜかくすす笑いました。

「僕、毎朝、自転車にのって、もらいにいこうかな。」

「泉の家の前は、桑畑なんだぜ。だから、すこしばかり取ったって、かまわないのさ。」

「泉の家から、火葬場が近いんだってね。」と、誠一が聞きました。

「だから桑の木のこやしに火葬場の灰をやるんだよ。」

「えっ、火葬場の灰をやるの。」

「いつてみたまえ、根のところは白くなってるから。」

「僕、もういくのをよした。」

「どうして。」

「だって、気味がわるいもの。」

誠一には、手に持っている桑の葉の光が、急に普通とちがっているように感じられたのです。その葉は捨てなかつたけれど、それからは、やはり原っぱへ行って、桑の葉を取つ

てきました。

ある日、やぶのところ、十ばかりの女の子と、八つばかりの男の子が、桑の木の方に向かつて立っていました。とんぼを捕るのでもなければ、また、きちきちを捕るようなようすもなかったのです。

「なにしているの。」と、不思議に思つて、誠一は、聞きました。

「桑の葉を取りにきたの。」

「どこから。」

「私の家は、あの赤い屋根のお家よ。」

誠一は、いつかみんな葉を取つてはいけなないといった、おばさんの家だと思いました。

「おかいこをたくさん飼っているの。」

「五十匹ばかりいるの。」

「たくさんいるんだね。」

「もう、そろそろ上がりかけているわ。」

「早いなあ、僕も桑の葉を取りにきたのさ。」と、誠一がいうと、

「大きなへびがいるよ。」と、男の子が、いいました。

「どこに？」と、誠一はびつくりしました。

「私が、学校の帰りにここを通ると、大きなへびが必ずこへはいつていったのよ。」

女の子が、そういうのを聞いて、誠一もおそろしくなりました。桑の木を見れば、摘んでも、摘んでも、伸びる若芽が、風の吹くたびになよよとかがやいています。その葉の間から、白い枝が見えるのが、なんだかへびのからんでいるようにも見えたのであります。誠一は、石や、土くれを拾って、やぶを目あてに投げていました。こうすれば、へびがどろいてどこへか姿をかくすからでした。

「お姉ちゃん、帰ろうよ。」

「僕が、取つてあげるから待つておいで。」

誠一は、勇気を出して、草を分けてはいつていきました。桑の枝を折ろうとすると、熟しきつた赤い実が、ぼとぼと落ちました。

「さあ、これを持ってお帰り。」

誠一は、桑の枝を女の子の手に渡してやったのです。

五

朝早く起きた誠一は、いつになく忙しそうでした。かいこが、いよいよ上がりがけたのです。学校へいつてしまった後で、お母さんがおへやへはいつてみると、手紙が置いてありました。

「まあ、なんででしょうか。」と、お母さんは、笑いながら、開けてごらんになりました。「お母さん、おかいこが口から糸を出したら、まぶしに入れてください。まぶしに入れたのには、桑をやらなくてください。糸を出さないほかのには、桑の葉を細かくきざんでやってください。誠一より。」

お母さんは虫はきらいでしたけれど、子供のためには、怖いとも思わず、なんでもしてやる気になられました。そして、おかいこの前へいつて、一つ、一つ、しらべていられました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

※表題は底本では、「芽《め》は伸《の》びる」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年4月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

芽は伸びる

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>